

## 第4回松本市中央図書館あり方検討委員会 議事録

日時：令和2年11月26日（木）13：30～17：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

### 【出席者】

伊東委員長、菊地副委員長、森委員、森田委員、吉成委員（テレビ会議で参加）  
（事務局）瀧澤中央図書館長、羽田野館長補佐、町田館長補佐、栗田館長補佐、  
百瀬主査、内山主査、丸山（和）主事

### 【議事録】

## 1 開会

瀧澤館長：

第4回松本市図書館あり方検討委員会を始めさせていただきます。

本日は吉成委員がテレビ会議でご参加いただいています。事務局も操作に不慣れなため、ご迷惑をおかけする点があるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

では、伊東委員長に進行をお願いします。

## 2 議題

### (1) 図書館協議会の報告

伊東委員長：

議題の1番、「図書館協議会からの報告」をお願いします。

事務局：

[11月20日に開催された第1回図書館協議会で、あり方検討委員会の報告の際に出た質問や意見について報告]（詳細については、11月20日第1回図書館協議会議事録をご覧ください）

伊東委員長：

協議会の意見の中で、「これまでの経過もあるのだから…」と、くぎを刺されていた部分もあるが、その辺も意識しながら進めていきたいですし、改めてしっかり注視されているということがわかりましたので、このことを前向きに捉えて、出された意見をふまえたうえで議論を進めていければと思います。

では、つぎの図書館サービスについて、いわゆる本論に入っていきたいと思います。

### (2) 図書館サービスについて

伊東委員長：

事務局から説明をお願いします。

事務局：

（素々案について、事務局から説明）

**伊東委員長：**

中身を前回と比較していただくと良くわかりますね。

また、前回の復習にと議事録を見ると、改めて皆さんがとても良いことを言っているということが認識できて、報告書を作らず議論集を出すだけでもいいのではないかと感じています。

それぞれを対応させた形で、織り込んで変更をかけられている部分を見比べていくとわかるのですが、もう一步踏み込むとこれだけ皆さん良いことをおっしゃっているので、もっと書き加えても良いのではと思います。

それでは見ていただいた中で、ご意見をいただきながら進めていきたいと思いますが、いかがでしょうか。

**森田委員：**

ざっと読んで、言いたいことが6点あります。

- (1) 「知識・情報の拠点」に、「活動の拠点」も加えたらどうか。
- (2) 「本が少ない」という声に、気づいていないという課題を明確化すべき。
- (3) 「図書館に来ない人をどう呼ぶか」ということがとても大事で。これを1点目として挙げたらどうか。
- (4) 目指す姿に「場の提供」というのはとても良いことで、『場の提供』をしっかりやります」と明記すること。また、前段で「地域の課題解決を支援」の「支援」がとかく曖昧であり、「支援」は待っていればやってくれるのか、自らやることを促すのかが、はっきりしない。必要なことは後者だと思うので、「自らやることを促す」や「環境を作ってあげる」ということで、「場の提供」を強めてみたらどうか。
- (5) 「ICT」が何のために進めるのかが触れられていないので、「ICTは、情報の共有を進めることでもある」ことを明記する。
- (6) 図書館は知るということを支える場所でありながら、地域のことをまとめていく、つまり、「表現をする場」でもある。本は地域に関係なく一般的な本が世の中にたくさんあるが、その中でも地域に関係する本はとても貴重であり、存在しない本は自分たち（図書館員だけでなく市民も含む）で作っていく。そういう意味では、図書館は「表現の場」でもあり、「地域資料を編纂していく、地域情報を編集していく」ことを明記するといいいのではないか。以上の6点です。

**森委員：**

構成がとてもわかりやすくなったと思います。

特に、これからのあり方の部分について、まず「目指す姿」があって、それに対する「視点」という形になっていることがわかりやすい。よくある形として、「ミッション・ビジョン・バリュー（ストラテジー）があって、アクション」というような定型があるので、ここでは最初にビジョンに相当するような姿がある、それを実現していくためにはストラテジーとして、「こういった視点が必要です」と受ける形で、とてもわかりやすい。

ただ、この姿を実現する手段として、例えば1点目の「一人ひとりの市民が豊かに暮らすために必要とする資料や情報を提供」とか、「生涯にわたり、市民一人ひとりの『知る自由』を保障する場」に対して、どのように実現していくのかという「姿と視点のつながり」が、わかっている人には行間を埋められるけれども、そうじゃない人が一読した時には単に情報の羅列に見えてしまう。そこを有機的につなげる方法を考える必要があるのではないか。

各視点に具体的な事例を挙げれば見えてくるのか、あるいはそれぞれの所にもう少し言葉を足さないとながりが見えてこないのか、ということを考えてたい。

森田委員のご意見の中にもあったように、「視点」として挙がっていることや「目指す姿」として挙がっていることの順番や、その中での文脈が、ちょっとわかりにくい。読んでいったときに、すんなりと入ってくる流れを意識して、重要性の高い順に出てきている必要がある。そういった全体のストーリーを考えながら並び替え、肉付けをする必要もある。

図書館協議会からのご意見は、さすがに意識も高く良い意見が出てくる。なるほどと思う反面、多くの方はそこまで考えていないであろうことを考慮すれば、やっぱり「読んでもらえるもの」にする工夫が必要。

読者の層によって戦略も違うし、「サマリーをつけるかどうか」ということにもなる。「はじめに」は前提の話になっているが、「この頁さえ読めば結論がわかります」というものを付けないと、忙しい人は読んでくれない。全部読んだら「なるほど」と思うかもしれないが。ポンチ絵（概念図）を入れるのもひとつの手段。ポンチ絵は意外と読み解くのが難しいので、文章も添えて、そこだけ読めば結論がわかるようにしたほうが良い。

結局、これをざっと見たときに、「やっぱり改築すべき」とか、「本当にこの場所でいいのか考え直すべき」、あるいは「図書館は、結構使えるところだ、これから期待できる！」という印象が最後に残る、それがどういった形なのかということを考えていけたらと思います。

#### 伊東委員長：

森委員がおっしゃったことに関連してですが、私も少し感じていて、先日の話で「逆三角形」という言い方をしましたが、「最初にドンと結論を置いて、後から細かく記述していく」やり方もいいのかなという気がしました。

それと細かい部分になりますが、「3 これからの松本市中央図書館のあり方」の部分がメインになっていくわけですが、分類が図書館分類（資料があって、資料提供サービスがあって、レファレンスサービスがある）になっていて、通常でしたらこの順番で間違いはないのですが、見る人に蔵書の話をもっと最初にぶつけるのはいかがなものか。結論あつての話ではありませんが、前段として「何故、資料をこういう揃え方をしたいと思っている」のか、蔵書計画は内々でやっていただくとして、むしろ市民には「資料を揃えるための理由」を伝えていくことが大切になる。

それを「活動」という言葉で表現したいのですが、市民の活動に資料がどのようにつながっていくのか、そのような理由で資料の量と質をこんなふう揃えていくという流れになるのでしょうか。

また、レファレンスサービスが表題に来るのは図書館的には普通なのかもしれないが、地域の課題に対応するのはレファレンスサービスだけではない、つまり表題としては「地域の課題対応」があって、その中のひとコマとしてレファレンスサービスもあれば、関係機関との連携もある。ということになれば少し組み立て方も変わってきて、森委員と近い感覚をもったのかな、と聞いていた。

#### 吉成委員：

「はじめに」をもう少し分かりやすくする必要があると思っています。

「はじめに」の第2パラグラフで、「人口が減少し、・・・」から「・・・様々な課題に直面しており、これらの課題解決のため、多角的な知識や視野からの情報がますます必要となる。」という書き方であれば、自分たちとはあまり関係のない他人事のような感じを受ける。

「何のための課題解決であるか」ということを考えれば、私たちが今、生きている今を未来に拓いていくための道具や糧として、これらの情報や知識が必要であると。あくまでも私たちが生きていくために、情報を使って活動や様々な形で研鑽を積んだり、新たなアクティビティにつながっていくのだろうと。

要は「私たち」というところ、つまり主語「私たちが～」を入れていくことで、よりはっきりするのではないかと。「何のために図書館があるのか」ということが、明確になっていくのではないかと思います。

**菊地委員：**

この素々案は、これから様々な言葉を紡いでいくという前段階で、項目が列挙されている状態であると認識している。「3 これからの松本市中央図書館のあり方」に関しては、まだまだ出していく項目の順番等も含め、検討の余地があるのではないかと感じている。

構成としてはとてもわかりやすくなってきたとあっていて、特に「3 これからの松本市中央図書館のあり方」では、先ずビジョンを掲げ、そのビジョンを達成のために視点をひとつずつクリアしていくことが将来像・理想像に繋がる流れになっている。

目標・・・ゴールといってもいいと思うが、「(2) これからの図書館サービスに求められる視点」で図書館サービス全体のことを言って、その図書館サービスを支えることで、ソフト面・ハード面ともなる「(3) 目指すサービスを支える組織や職員に求められる視点」があり、「(4) 目指すサービスを支える施設や設備の整備に求められる視点」がある、という構成自体は、分かりやすくなっている。

あとは「肝心なそれぞれの視点を、どのような構成で語っていくのか」、その一つひとつの視点をどういう言葉で紡いでいくのか、と、思っているところです。

**伊東委員長：**

おおよその骨格ということだが、前回と同じく、今後進む過程で、また変わっていく話ではあるだろう。菊地委員が言われたように、中身の方への議論を少し進めて、「どう思っている」ということを喋っていただければいいと思います。

**森田委員：**

「この場所ではなくて、他の場所に移転する」という観点は、どうですか？

もちろん、この場所でもできることは十分にあるわけですが、「まちの中にあつたらどうなるのか」という観点については、どうでしょうか。

**伊東委員長：**

図書館のあり方ということから考えれば、この場所にあることがどうであるかは、確かに課題としてある。そうであれば、建て替えや移転についての提案に踏み込まないまでも、「そもそも図書館としてどうありたいのか」という部分では触れても良いのではないかと感じている。

例えば、駐車場が狭いという課題がありますが、昔は「公園の中の図書館だった」ことが、今は「交通の便や集まりやすい場所に・・・」と言われ、さらに、「まちの賑わい」なんて言葉も加わるようになってきた図書館なので、そんな事例を示していくのもいいかもしれないし、そういうことを配慮した、将来の図書館像を考えて欲しい、というような提言の仕方もある。

森田委員：

同感ですね。

森委員：

今の話に続けて。

(2)の「視点5 図書館を利用したことの無い市民へのアピール」や、(4)の「視点3 分館ネットワーク」のところに、書かれている。これからのサービスに求められるという一番大事な所に、「使っていない人に」という部分を書き込まれているのはとても良いが、「使っている人」にとってもそうであって欲しい。それから、「視点3 分館ネットワーク」の分館をもっとPRすることによって、もっと身近に感じてもらうということにもなる。

図書館は「来てもらってなんぼ」という部分と、「こちらから寄り添っていく」部分と両方が必要ですが、そこは切り分けて、「来てもらう」という視点で来てもらいやすくする話と、それでも来てもらえない人に「こちらから出向きますよ」、という両方が必要になると思う。こちらから出向く手段が、移動図書館という物理的な本の運搬、郵送サービスに加えて、デジタルサービス、オンラインでアクセスできるものを増やすことが、新たな手段としてある。そして最後に、そういった工夫をしたうえで「この中央図書館はこの場所で良いのだろうか」、という移転の問題が出てくるのかなと。それくらい、「身近にある図書館」には、多様な実現方策があるはず。

これから構成を組み替えていく際、今のような構成だとばらばらに散らばっている項目に横串を刺すような、目次自体にも横串が刺されているような構成に変えることが必要かもしれない。あるいは今の構成で、要素は分散していても、解説的に「これとこれとこれを組み合わせることで、こういうことが言えますよ」というような補足説明をするか、どちらかをしないと、「知りたいこと」が流れのあるストーリーにならない。

今のはひとつの事例であって、他のことにも同じことが言える。やりたいと思っているビジョンに対して、ストラテジーなりゴールなりが、あちこちに分散していることを、どう読み易くするのが考えどころなのかなと思いました。

伊東委員長：

なるほど、そうですね、これは本当に難しいですよ。

記載内容に満足しているわけではなく、「ダブるよね」というところが今でも見えている状態。もう少しの間、具体的に書きながらまとめる作業を並行していくしかない。

職員の意識の話も書けば書くほど、サービスの話は「あり方」になってしまう。職員の意識だけがポツンとあるのではなく、「こういう意識があるから、こんなサービスができる」ということ。サービスはつながっていくので、結局「こういうサービスをやろう！」という裏には、「職員の意識がないとできない」というところがあって、「この切り分けはできるのかな？」ということがある。

森委員：

前回、森田委員から「各章の頭は、問いで始まって欲しい」というお話があった。また、伊東委員長がおっしゃった中にも「何のために、何故」というキーワードが出ていた。「何故こうしたいのか」ということがあると、「こういう理由だ」。そして、「それを実現するにはこうなんだ」という話がくつついてくる。

全体のボリュームを大きくし過ぎるのも良くはないが、「この視点で見ればこうで、でも同じ

ことが別の切り口から見ればこういうことだ」というふうに、ある程度重複があってもいいような気がします。「ICTを何故やるのか」とか、「これだけの資料情報を揃えるのは、何故か」という問いの先に、「市民の活動に資すること」がある。「市民の活動を支えるために、私たちは何ができますか」という問いがあり、そこにいろいろな要素がくっついてくるわけですから。

**伊東委員長：**

そんな感じで、話は中身と作りの間を、いい意味で行ったり来たりしながら進んでいくのがいいと思うので、目についたというか、思うところを喋っていただきたい。

**菊地委員：**

「はじめに」の文言の視点として。グローバルな視点であったり、現代という時代全体を見渡した時の視点であったり・・・というところはもちろんなのですが、報告書を受け取る側が市民一人ひとりなので、いかに最初の視点に戻してあげるか、立ち返って書いていくということは、「はじめに」に限らず、報告書全般について言えることではないでしょうか。

森委員の今の話を聞きながら、「これを読んだ市民一人ひとりがどう感じるのか」、「この言葉と構成で一人ひとりに届くのか」、という姿勢で書いていくことが、大事なのではと感じた。

また、吉成委員は、主語が「私たち」ということを言われたが、常にその視点を忘れずに書いていくと、統一感が出るというか、整合性が取れたものになるのではないかと、思った

**伊東委員長：**

そうですね、それは大事なことですよね。

ただ報告書は私たち委員会の報告書ですから、文章の中の「私たち」が私たち委員会になってしまいかねない。ですから、大筋を書いた段階で十二分に調整していく必要があるかもしれません。そして、誰にもわかりやすいような提案をしていく必要がありますね。

**菊地委員：**

前回の会議で伊東委員長が組織のことについて触れていた件で、「はじめに」の中にある『中央図書館』は蟻ヶ崎にある中央図書館で、そのまま読み進めていくと分館ネットワークの部分で、初めて「『中央図書館』とは分館を含めた全体を言うのか」と気づくことになりかねない。

『中央図書館』という定義を、早いうちに示したほうがいいのではないかと。

**伊東委員長：**

その件は、先日、言わせていただいたが、ずっと引っかかっていた。

**森田委員：**

僕もです。

**伊東委員長：**

「はじめに」の最後の所でも良いので、この報告書は提言書のようなものなので「今の扱いは間違っているのでは」という提案をしたらどうかと思う。

細かい話になるが、条例の名称は「松本市図書館条例」。その条例で「『中央図書館』を蟻ヶ崎に置く」となっていて、それを以って図書館の名称を「松本市中央図書館」としている。しかし、日本の多くの場合は、条例名をそのまま図書館名にしている。

例えば、吉成委員、岐阜市立図書館の場合、「岐阜市立図書館条例」ですよね？

吉成委員：

そうです、そのとおりです。

伊東委員長：

「メディアコスモス」は、中央図書館ですか？

吉成委員：

「メディアコスモス」は、また別です。

伊東委員長：

一つ一つに、名称があるんですよね。

吉成委員：

はい。

伊東委員長：

一般的にはその形ですので、蟻ヶ崎にあるのがあくまでも『中央図書館』で、全体のネットワークとしての図書館は『松本市図書館』であるという前提で、報告書に断り書きを書いたらどうかと思いますが、いかがですか？

菊地委員：

なるほど、それが良いと思います。

伊東委員長：

それは既に提案をしていることなので、それを取り上げるかどうかは松本市で調整していただくしかないと思っています。

それから小さなこととなりますが、レファレンスサービスで、「地域とつなぐ」という部分が弱いと感じた。何故弱いかと言えば、やっていない部分であり、やっていることは流れるように出てきている。地域課題に対応したサービスについて、「今、何をやっているのか」、「やれていないことはどんなことなのか」の区別がどれくらいできているのかが見えてこない。

例えば、「学校連携」という言葉が見当たらない。連携先としてどこをイメージしているのか、何をしていくのかをはっきりすべきで、貸出サービスや閲覧サービスと同じように、一つひとつを羅列する必要はないけれど、「図書館は何のためにある？」というあり方は、「地域」という言葉を外せない議論を進めている中では、このところをもっとしっかり書き込まなければ、という気がしている。

他にいかがですか？

事務局：

視点のことですが、何が一番重要なのか順番付けをしていただきたいと思います。

森委員：

(視点3 一人ひとりの「学ぶ」を支える)が、トップに来る必要があると考えます。

すべての人に資するために、「多様な資料や情報を提供しなければならない」し、「地域の課題解決に資することができなければならない」ということです。そういう意味では、「いま挙げている視点が、全部同じレベルで必要なのか」という見直しも、もうひとつ必要なのではないかと思います。

います。

それから、「目指す姿」も少し項目数が多い。3つか4つに集約ができないものか。列挙されているものをグルーピングする作業が必要であり、その作業は、視点と行ったり来たりしながらになるだろう。「視点がこういうふうだから、将来像をこのようにまとめたほうが分かりやすい」ということがあるはずです。

**吉成委員：**

森委員が言われたように、一番大きな視点は（視点3 一人ひとりの「学ぶ」を支える）だと思った。また、「3、4」とも言いたい。「3、4」と「1、2、5」は絡みながらでもいいという気がするが、やはり「図書館が変わっていく」ということを前提にして考えていくのであれば、2つくらいの視点でハッキリ打ち出した方がいいように感じている。並列でなくてもいいだろうと思う。

視点1と2は、よほど図書館を利用している人でなければよく分からない。それに、1と2から読んでいくと、「ああ、やっぱり変わらないんですね・・・」と思われるかもしれないので、やはり、価値判断として何を一番上に置くかという順番は、大事だと思う。

**伊東委員長：**

この議論は、軸の部分だと思う。

**森委員：**

では、(4) 目指すサービスを支える施設や設備の整備に求められる視点) について。

視点の順番としては、(視点2 多様な利用形態を可能にする居心地のよい公共空間) は多分、物理的な意味合いだけではなく、これからはバーチャルな空間も入ってくる。それを考慮すれば、最も上位概念になるのは(視点2 多様な利用形態を可能にする居心地のよい公共空間) になる。

その手段として物理的に「皆さんの身近に分館があります。分館は中央図書館とも他の分館ともつながっています(視点3 分館ネットワーク)、それを下支えするICTを活用します(視点1 ICTの活用)、という順番になるのではないか。

**菊地委員：**

(4) 目指すサービスを支える施設や設備の整備に求められる視点) に関しては、全く同感。(視点2 多様な利用形態を可能にする居心地のよい公共空間)、(視点3 分館ネットワーク)、(視点1 ICTの活用) の順番だろう。

**伊東委員長：**

もう一度(2) これからの図書館サービスに求められる視点) に戻ります。

議論では、(視点3 一人ひとりの「学ぶ」を支える) にあるように、『学ぶ』が括弧付けになったが、概念としては「地域に役立つ」というようなことが上位であり、そのなかに「学んだり資、料提供を受けたり、いろいろがある」という流れになる。

先ほど「レファレンスサービスのなかに地域課題に対応したサービスがない。逆じゃないのか?」と言ったのは、全体が地域課題に対応したサービス、地域課題・地域の抱えている課題とは、そういう意味ではなく、「地域にある課題」という意味なので、読書要求も含めて個人個人が持っている小さな課題・問題、いろいろなものに対して図書館が大なり小なり、サービスができるという構造の方が、表現としては近い。そこを組み替えると、(視点2 レファレンスサービス



の充実と利用促進)の方が先に来ると思う。今、喋っているのは前書きかな? だから並列じゃないことを、喋っているような気がしていますが…。目指す姿に、それがあってもいいのだろうか。

**森委員 :**

そこはとても大事なところだと思う。この先の議論は個々人の思想・信条的なところにも入っていくと思うが、地域の課題解決をする以前に、「個人の、一人ひとりの人権ではないかな」と思う。多分、同じ方向を向いていると思うので、ニワトリと卵のような話ですが…。

**伊東委員長 :**

その部分に関しては、地域のなかに個人が完璧に入っているのだから、地域のなかにいる一人ひとりが課題を持っているし、それこそ水害問題のような文字どおりの地域の課題もある。そして、地域の中にいるのは一人ひとりの人間なので、「地域」という言葉の中には、全部入っている。

しかし、ここで議論すべき「地域」は松本市のこと。一方、地域という言葉にはもっと小さなコミュニティーもあれば、コミュニティーの中の「向こう三軒両隣」もある。また、隣との問題もあれば家族の問題もあるというように、全部が入ってしまうので…だから「地域」という言葉で括ることがいけないのかもしれない。

全部をくくって喋ってしまうが、それが通じないとすると、「言葉を説明しながら喋らなければいけないかな」というところでもあるが、「どちらが先か」ということではない。

**森委員 :**

「公共図書館」と言うときの『公共』という言葉を考えてときに感じることもありますが、「一人ひとりが誰かの役に立たなければいけないんですか」と感じる。「地域に役立つ私じゃなきゃいけませんか」とか。もしかしたら、伊東委員長が捉えておられる『地域』は、もっともっと大きく包括的な概念かもしれないのだが、一般的には、「もうちょっとローカルな、こじんまりしたイメージ」を持つ言葉ではないと思うので、仮にそれを使うのだとしたら、定義づけが必要だと思う。

**吉成委員 :**

両方、分かりますね…。

**森田委員 :**

竹内哲先生の『生きるための図書館』(2019 岩波新書)、けっこう、究極なタイトル。

吉成委員から「今を生きる」という話があったが、「生きる」ということは、一番いいのは自立して生きるということだが、人は強くないので「共に生きる」とか、そういう言葉を少し添えて、「地域で…」とか、「生きるための」と言ってしまうと強すぎるので、ちょっと言葉を添えて入れてはどうか。「地域で、共に生きていく」というような。役立つというのも、「よく生きる」ということだと思うので。

**伊東委員長 :**

「生きる」というのは、児童サービスや学校教育で、普通に「生きる力」というように使う言葉だし、図書館が「地域に役立つ図書館づくりを進めたい」というときの『地域』って、「それなら、どんな地域を目指すのですか?」という言い方を返されたときには、『自立した社会』になる。自分が情報をちゃんと取得して、責任をもって判断できる社会にしていけないと、自立してい

ないし、誤った方向に最後は行ってしまふ、というようなことが前段にある。だから、それを図書館が情報でサポートしていく、応援していくという役割が『役立つ図書館』だというような流れがあるので、森田委員の「自立した社会づくり、人づくりのために」という流れを、きちんと謳うというのは大事かもしれない。

**森田委員：**

なかなか自立できないときもあって、人にはやはり弱くなる時がある。自立を目指していても、人には良いとき、悪いときがあるので、助け合いながら…というイメージを「共に生きる」というふうにしたらどうかなと思う。

**吉成委員：**

「共に生きる」という言い方は、もうひとつ「人と関わりながら、生きる」でもありますよね。

**森田委員：**

そのとおりだと思う。前回もお話したが、「関係性」とか「自分たちごと」とか、そういうことにつながってくる。しかし、文章があまり長くなると、だらっとしてしまうので、どういうふうにすれば良いか…。

**森委員：**

『学都』というキーワードを大事にしようという話があった。松本というところは、公民館活動も市民活動もそうだと思うが、まさに今、話題になっていたようなことを、市民がやってきた伝統、誇りがあると思う。「学都の学は『学ぶ』である」ということなので、学びながらよりよい社会をともに生きていく松本市民、その人たちが作るのが『学都』である。そして『学都』を支えるのは図書館。「図書館が『学都』を支えます」という、そんな流れがあるのではないかな。

**伊東委員長：**

3時になりましたので、一旦休憩をはさみたいと思います。

===== 休憩 =====

**伊東委員長：**

それでは再開します。

今日の議題には「(3) 目指すサービスを支える組織・職員に求められる視点」というところまで書いてあるので、後半は、そちらも含めて話していきたい。先ほどの「順番」という意味ではこのところは、まだ話に出ていないが、その辺りも含めてどうでしょうか。

『検討委員会』という立場では、「ここに何を書き込まなければならないのか」を、私たちは考えていきたい。

**森委員：**

何をどこまで盛り込むのか、どういう分け方のするのか、という整理がこれから必要だと思う。「住民サービスの一層の向上」のようなことがここに入ってくるか、とか。今は列挙されているだけで、これからの整理になると思う。

また、「管理運営形態」の中で警備員という話がある。警備員はいてもらえばいろいろな意味で安心できるし、職員のワークライフバランスを整えるために、女性だけで遅くまで残業するようなどときには、警備員が一人いるだけで安心感が違うということもある。そういう外部の業務委託的な力を要所ごとに入れていくこと自体は、悪いことではないと思う。

「複数の選択肢」と書かれているように、ここに書かれた形態ありきではなく、全てはより良いサービスを無理なく持続的に続けていくために必要な体制だということだと思う。目的が先にあって、手段としてサラッと書いてあればいいのではないかと思う。

組織職員が大きく事項立てがなされているなかに、ずいぶん様々な要素が入り込んでいるという感じがする。ここで語りたいのであれば、事項立てを考えた方がいいのかもしれない。

運営方法のなかで「効率的な」というキーワードだけだと、非常に危険。効率性だけを求められると、いろいろなところが瓦解してくる。効率性はもちろん必要だが、このキーワードは「持続可能にするには、効率性も考えないと持続することはできない」というくらいにしておいた方がいいのかもしれないと思う。

**伊東委員長：**

「視点3 効率的な運用方法」が細かく羅列されているのは、前回、大分発言があって、それらをピックアップしてもらっているのだと思う。いろいろな考え方も入ってくるころではあるので、具体的な文章の中で、委員として許容できるものになっているのかどうかを見てくことになると思うし、この辺は前回も出ているところだと思う。

また、いろいろ出てきているというのは「その他」に入ることではないか。危機管理も出てきているが、「運営」と言ってしまうと、全部運営になるので、そこを割り切って書くのか、もっと整理しなければならないのか、いずれにしても検討しなければならないという気がしている。

**森田委員：**

先ほど「警備員」の話があったが、「図書館は安全な所」であることを目指すとしてはどうか。お子さんが来てずっとそこに居ても、親御さんは安心していられるとか、安全だったり安心だったりということを目指したいとことで。

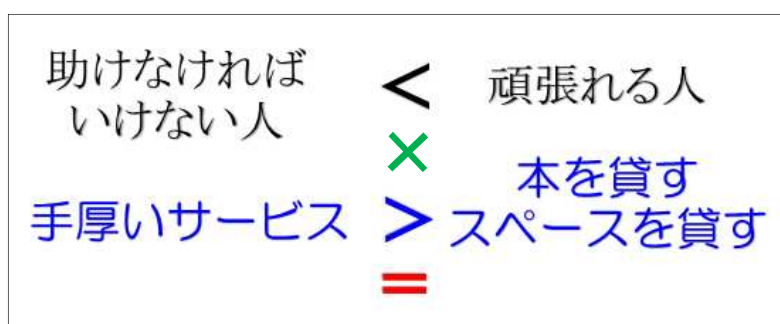
ここでとても大事なことは、スタッフがプロフェッショナル性をどう考えていくかということだと思う。「自分がプロフェッショナルというところに、何を置くのか」は、人それぞれいろいろな考え方があって違うと思うので、そこはスタッフみんなに振ってみたらどうか。考えてもらう

というか…。

僕はよく「例示力」と言っている。何か来たときに、「例えばこういうのがありますよ」という。いかどうかを決めるのは本人なので、そのときに、「絶対こういうふうなことなんだろうな」というようなことを察知して、情報をいくつか提示する。そして、その「例示力」は、図書館員にしかできない技だと思っている、書店員にもない。書店員は本を出すことはできるが、ちょっと違う技術だと思っている。例示するためには人の話を聞かなければいけないので、傾聴をしたり、いろいろなことをしていく。「図書館員のプロフェッショナル性を置くところは、『例示力』では」と思っている。

最後に「この話をしておいた方がいいかな…」というところで、ちょっと面倒くさい話なのだが…。(板書しながら) この話は、たまに図書館の方にしている。

「頑張れる人」「助けなければいけない人」。「人」というか、そういうときがあるという話。



ホワイトボード1

大体、頑張れる人が多いので、頑張れる人には自分で頑張れる環境を作る。「本、借りてください」「スペース、どうぞ。うまく使ってください」と。

そして、反対にすごく手厚いサービスがある。スタッフは大変。これはイコール。これとこれを掛けるというか…。つまり、「助け

なければいけない人に対する手厚いサービス」と、「頑張れる人に対するサービス」はイコールになる。これこそが、平等化だと思っている。これをどうするのか、しっかりやるのかということが、図書館で見落としているところでもある。

「全ての人に、均質なサービス」ということを思い込んでいる人がいるが、「実は、そうではないということ、もう一度改めて認識するのはどうでしょうか」ということ。

で、「具体的に何だ？」ということですが、「相談」ということです、すごく大事なことです。

「相談を手厚くする」とか「相談されるのを待っている」ということではなくて、職員に求められるスキルというか、プロフェッショナル性をしっかりと持つこと。そうであれば、「それは、アルバイトでもできるのでは」ということにはならない。それは裏表ですが、「これができることで、スタッフはずっとここで活躍する」ことにつながっていく。

#### 森委員：

森田委員のお話は「(2) これからの図書館サービスに求められる視点」の「視点3 一人ひとりの『学ぶ』を支える」に列挙されている人たち…例えば、情報弱者であるとか、図書館利用に障害のある人へのサービスとか、ですね。今、便宜的にこういうふうに章立てをしています、これを成立させるのは、「(3) 目指すサービスを支える組織・職員に求められる視点」で言う「人」あるいは、「職員」に紐づけをしたうえで、ということですね。

プロフェッショナルという話が出てきたけれど、プロフェッショナルは、「司書の資格を持っている」ということだけではない。そこは、きっと共感してもらえる部分があると思う。

最後のメモの「職員に求めるもの」のところで、館長、行政事務職員、司書と列挙してあるが、この人たちの力がミックスされることで、それぞれの得意分野、それぞれのプロフェッショナル

が活かされて相乗効果が生まれる、ということがとても大事だと思う。

図書館の専門性という、どうしても司書の資格的な話だとかレファレンスができることとかだけに行ってしまうがちだが、決してそうではない。行政側とのいろいろなパイプがあって、図書館のサービスが、必要に応じて然るべきところへ繋げるということは、図書館の建物の中にいるだけでは十分にできないこと。行政から来ている人に繋いでもらうとか、具体的に文章化ができるといいと思う。

**伊東委員長：**

さらに上積みして喋らせていただくと、その手厚いサービスの部分がありすぎていなかった図書館という課題がひとつある。それに手を付け始めてきているとは思っているのだが、まだまだ情報発信ができていないということで、「図書館って、図書館員も誤解しているが、資料費に恵まれて、本が揃っていて、なのにどうしてクレームが寄せられるのか？」というところの課題しか浮かんでこないというのは、情報弱者を始めとするこっちへのサービス。ここでも、地域の中で情報を得られずにさまよっている人たちを応援するサービス。だからこそ「地域に役立つサービス」というところへ繋がっていく。

だから、そういう人たちへのサービスが図書館はキチンとできるというのがひとつ、それを発信していくのがひとつ、ということだろう。それをやっていくには兎にも角にも職員の意識だということも重要になっていると、話は繋がっていく。

先ほど「職員の話の突き詰めていくと、サービスの問題になりますね」と言ったのは、まさに今の話と同じ。逆に言うと、警備員がいるかいないのかとか、資料費がどのぐらいがどうだとかという話は後で一生懸命やってもらおうとして、「あり方」という話では、図書館が地域のなかでどうあるべきか、そのために職員がどうあるべきかと…あまり選択肢がたくさんあるわけではなく、もう書くべきことは決まっている気がする。

**吉成委員：**

サービスについては、書き込まなければいけないことではあるものの、現実があるので、あまり書き過ぎると逆に現場が身動きできなくなる気がする。助けなければいけない人へ手厚いサービスというところを、「例えばこういうサービスを、こういう図書館では既にやっている」というように、部分的かもしれないが、図書館のなかでは既に実現しているサービスだというところを増やした方がいいと思う。いきなり、「なんでもできる」というのは無理なので、そこを書き込みすぎるよりは具体例を入れた方がいいと思う。

**伊東委員長：**

吉成委員と申し合わせたわけではないが、後半は具体例の話にしていこうと思っていた。絞り込みまではしないにしても、「この件については、あの図書館がいいよね」といった情報交換をしていきたい。

**吉成委員：**

今の話とぴったり結びつくという例ではなく、図書館の規模も小さいのだが、僕がメディアコスモスの図書館の館長になるときに唯一、参考にしてきたのは、長崎県の多良見町、多良見図書館だった。

そこは、一人ひとりがくつろいで、自分の場所があるという感じがする図書館。本棚の間に人ひとりが座れる場所がポツポツとあったり、YAサービスの中高生が来るときは、彼らが物陰に

隠れられるように本棚の配置がなされているなど、司書たちも計画段階から入って、空間の使い方を考えていたという話を聞いており、そういう意味で非常にしっくりするという感じがした。具体的な写真等を見てもらわないと、なかなか分からないと思うが…。

**菊地委員：**

今の話は他の図書館で、既にこうした実践をしている例があれば、情報を共有しようということではいいか。

私は、松本市内の図書館での先進的な事例があれば、それをさらに伸ばしていくということも入れてもいいと思った。その一方で先行事例として全国の…世界に広げてもいいと思うが、公共図書館で行われていることがあるが、松本市としてはそれをひとつのベンチマークとして、目指していきたいという事例紹介でもいいと思う。どちらもあっていいと思った。

**伊東委員長：**

報告書に入れ込むのに値するものであれば、どちらでも問題はない。言いたかったのは、ここに事例、事例と書いてあることの答え…言ってみれば「先進事例」というもの。

**森田委員：**

「先進」ではなく、もう当たり前になってしまっている事例としては、医療情報と法情報は、ひとつの事例というか、世の中の流れになっている。特に法情報では、交通事故を起こしてしまって、賠償問題やトラブルを抱えているような人が来るとか、家庭のいろいろな法律上の問題に対して丁寧に対応するという、横浜市立中央図書館のような先駆けの事例があったり、鳥取県立図書館のように医療情報をしっかりやっていくとか、各地でもうやっていることがある。

たとえば、糖尿病等で後天的に視力に障害を患った人、パーキンソン症の人だとか身体的な不自由。他にも認知症とか、いろいろなことが起こると思うので、それが「助けなければいけない人」と思っている。もともと弱い人というのはいないと思うので、そういうことをやっていくというふうに言えばいいのではないかと思う。

もともと医療情報と法情報で最初に頑張っていた事例としては、横浜市立中央は筆頭に上がると思うので、「例えば…」というときにはそこを挙げればいいと思う。そういう意味では、鳥取県立図書館も立ち上がっていった。そこを見習って各地で、医療とか法とかということをしっかりやろうということになっていった。

当然、身体の不自由な人には無料で本を宅配するということは行政としてやっていると思うが、それはある意味、人が介在しなくてもできそうな気がする。やはりプロフェッショナルとして関わるのは、前者なのではないかという気がする。相談に乗ってあげられるというのは機械が代わってやることはできないことなので。

**森委員：**

今の話はこれまでの、松本市図書館職員のワークショップのなかで、職員の皆さんから自分たちの強みとして出てきたり、他所の事例で「ここがいいな」と思っている所とかが、たくさん出てきているので、それに加えて良いものがあれば、補足的に出していけば良い。

出来あがった報告書があまりにも立派になってしまい、「なんだか手も足も出ません…」というように、報告書と職員が乖離するのが一番怖い。やはり職員自身のなかから出てきたものを汲み取って反映したい。

例えば塩尻はお隣だし、いつも例示されると思うが、「塩尻のこういうところがいいな。でも、

私たちはできていない。どうやればできる？」とか、「何がハードルになってできていないの？」とか、そういうところを繋げていきたいと思う。

これから報告書を仕上げ、サービス計画を立てていくプロセスで、作っているものと職員とが乖離していくのでは、絵に描いた餅になってしまう。今も委員会に同席している職員の皆さんから「そんなことを言われても、ここを解決しなければどうにもならない。」とかいうことを言ってもらいたいのではないかと。そういうやり取りがなければ、本当に絵に描いた餅になってしまう。それは一番、やりたくないこと。

例えばMTDの通信の第2号で、委員会の中で出た話題を「こんなふうには受け止めたよ」というようなアウトプットに繋げてもらいたいと思う。

資料費が多いのは、背中合わせで業務も多いということなので、現実には相当厳しいのだろうというのは想像に難くない。報告書で提言する内容に、人的体制についてもはっきり言わないといけないと思う。

「やりたいけどできない」という状況があるならば、できるようにする必要がある。それには多分、二つ方向性がある。現場の実感として「これ以上は無理・・・」だと思っても、違う観点から解決できる場合があることと、物理的に職員が足りないという折衝をどこかでやらなければならないということ。それは別の場であることだが、提言書がその後押しになるようにしたい。それは「あるべき姿」があつての「戦略」として語られること。

**森田委員：**

やはり、利用者に自立的にやってもらうことを作っていくということかもしれない。

**森委員：**

今、森田委員が言われたように、職員だけが頑張らなくてもいいはず。

サインのあり方ひとつ変わるだけで、利用者が職員に頼らなくてもいいようになることであるとか、そういうものは設備的なところにも関わることだろう。「今、こういう形だからここまで手間暇がかかってしまっている」というところは、効率化を考えなければならない。

それはデザインだと思う。建物であったり、サービスのデザインが分かりやすければ、利用者が自立的にやっていけるようになるので、職員はこっちに手をかけられるようになるというような組み替えは必要になってくると思う。

**伊東委員長：**

これは、非常に深刻な話ですね。

増やせばいいのであれば、方程式的には楽なのだが、「人数が多いところは、いいサービスをしているのか？」という話にも繋がる場所なので。

**吉成委員：**

聞いていて我が身を思うのだが、まんべんなく変えることはできないから、絶対に無理だと思う。「まんべんなく」は言いたくないし、それを出してもしょうがないと思っている。

委員会としては、どこか一点突破で行くしかない。「ここだけは、変えてほしい」という一点に絞っていくのがいいと思う。人は、課題ばかり出過ぎると、変えたくなくなってしまうから。

**伊東委員長：**

「一点に絞って」というのは、報告書でいうと、その中のどれかに絞ってということですか？

**吉成委員：**

報告書の作りではなく、今抱えている職員の数や体制の不備をどこまで指摘するかということ。それを指摘し過ぎると、すぐには変えられないということ。指摘しないということはありませんが、そちらよりも『図書館像』を引っ張る方がいいような気がする。

**伊東委員長：**

あり方を検討するわけなので、逆に言うと、「あり方」を並べれば並べるほど、ますます人が足りなくなるわけですね。

今の職員数に合わせた「あり方」ではなく、「あってほしい松本市立図書館」を提示することで、普通は、「それなら予算や本が足りないね」ということになるだろうが、それはあるようなので、次は「人が足りないね」というあたりに内部的な議論にもっていってもらいたいということ？

**吉成委員：**

私はそう思うのだが、どうだろう、皆さんと意見が同じかどうか。

**伊東委員長：**

そういう作りだろうと思う。私たちが「職員をあと 10 人増やせ」とか、そういう提言をする必要はないと思うので。

**吉成委員：**

司書さんたちがやっている仕事の内容についても、もちろん忙しいということやいろいろなことが理屈としてはあるのだが、私は、それが物理的な理屈だけなのか、そうではないというところなのか、いつも悩みながら見ているので、そこに引っ張られ過ぎてもいけないと思ったので。

**森委員：**

ここでは、「あるべき論」を語るべきだと思う。そのうえで、資料 3 の見せ方を、例えば議会で見たときに、もっと明らかな指標を出してみるというのはどうか。

今は「松本市は図書館数が多い方から 3 番目に出ているが、職員数はこうだ」という見せ方だが、職員数の少ない順に出すとか、資料費を職員数で割って、一人ひとりが抱えている業務量を見せるとかいう方法があると思う。ただ、蔵書数とか年間の受入数とか、資料費だけで試算をすると、「そういうことしか、図書館はやらないのか」というミスリードをする怖れがあるので、もうちょっと多角的に見えるように、「これだけの水準のサービスをするのに、明らかに職員が少ないんだね。」というのは付録として見せれば良いと思う。

「だから 10 人増やせ」とまで我々は言えないが、「あるべき論」と現在の統計情報を紐づけて出すことはできる。予算要求するときや人の要求を出すときに使える資料になると思う。今の資料のままでは「行間を読んでください」というところが大きすぎて、パッと見て、何が言いたいのか分からないのかもしれない。それを見える化していけばいいのではないかな。

**伊東委員長：**

前回 3 回目の議論で、「結局、職員だよな」というやりとりをしていたが、最後はそこへ行く。今、吉成委員が最後に言われた、物理的に足りないのか、違う部分なのかという問題も絡む。ちょっとキツイことを言うと、鳥取県立図書館の小林さんがいつも落としで言う「できない言い訳をするより、できることを考えろ」というのが好きで、「言い訳を考えてる暇があったら、仕事をしろ」というふうにもいつもやっていた。塩尻が成功事例だとは全く思っていないし、今は言え



ない立場になってしまったが、「なんとかしろよ」と思っているところもある。

立ち上げを始めた頃は予算面、人の面でも厳しい状況があつて「箱だけ新しくても、できるわけがない」と思いながらも歩み始めたところで変わった。職員、人は変わる。悩みながらだが、それをぶつけ合うことで、パート職員も含めて「今の仕事じゃダメだ」というようなところへ、キチンと行きついてくれて、「じゃあ、何する？」というところへ、次に行つて、その中から「今できることをやろう」と。時間を見つけてやっていくという結果として、今のところまで何とか漕ぎつけているので、基本的には変わるものだと思っている。だから、「やっぱり最後は人だよね」というのは、変わる人たちがいると思っているので、今の時点で聞くと厳しいセリフだと思う。しかし、無理で終わらせられるならそれまでだが、職員のワークショップで書いてあることを見ても、いろいろな前向きな意識を持った意見が出てきているので、サービス計画のときにしっかり議論してもらえれば生きてくるのではないかと、信じている。

私たちはその、燃えやすいものを書いておけばいいのかなと思う。後、火を点けるのは館長さんたちかなと思っている。

#### 菊地委員：

委員長、先ほど事例列举ということがあつたが、「事例挙げ」から離れてもよいか。

3(3)の「目指すサービスを支える組織・職員に求められる視点」をやり直し始めたところだと思うが、そこにも関連しつつ、吉成委員が言われた「一点突破」を意識しながら話をすると、今回のあり方検討委員会の報告書として、どこがこれまでの松本市立図書館と違う、これからの松本市立図書館になるのかというところで、一点突破で行くと、先ほど伊東委員長が3(2)の「図書館サービス」の視点の優先順位をどこから書き出すのかというときに、視点2のレファレンスサービスが今は見出しになっているが、そうではなく、見出しの下での報告のなかで語られている「地域の課題に向き合う」とか「地域課題に対応する」とか地域課題の解決というところを、視点2の見出しに置き換えた場合、これからの図書館サービスに求められる視点としては、視点2を先頭に書くことになるのではないか、と思っている。

何故かという、これまでの図書館とこれからの図書館で、「何を松本市は変えるのですか？」と言われたときに、これまでは「図書館を利用してくださる皆さんに、いかに良いサービスを提供するかを考えてきたのが松本市立図書館」でした。これからは「図書館を利用する、利用しないということに関わらず、松本市立図書館がこの地域にあるということが地域にとって必要なことにしていきます」、「この地域にとって、必要とされる図書館になっていくんです」というのが、一点突破で言うならば、これまでとこれからの間に一線を引くところだと思う。

話を(3)の組織と人の話に戻すと、これは(2)で語る、これからのこの地域にとっての松本市立図書館の図書館サービスという話と、(3)で書かれている、そのサービスを実践する人及び組織としての松本市立図書館として、(3)に書かれているのかという疑問が残る。

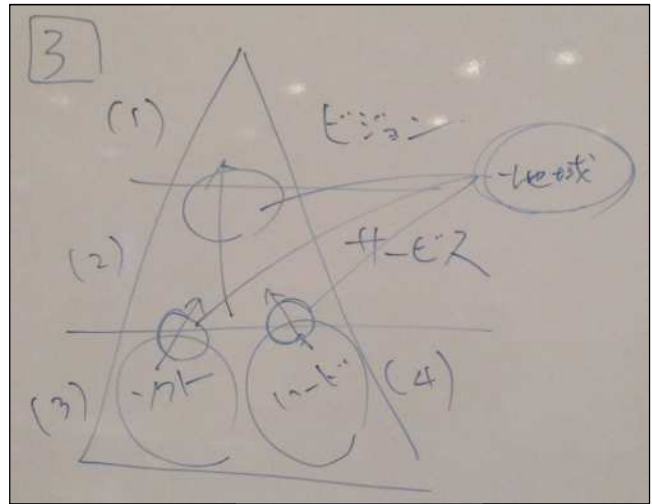
つまり、(2)で「地域のための図書館を目指す」と語るのであれば、(3)は地域のための図書館を実践する人及び組織としてどうあるべきかという資質及び姿勢を書くべきだと思う。…となると、今、書かれている(3)のなかで、書かれている視点の1、2、3、4は、どちらかという、これまでの延長線上にあることを高めていきますという話になってくるのではないかと。

そのマインドチェンジが(3)ではあまり見られないというところがあるので、その視点で改めて書いてみるというのではないかと、思いながら今までの議論を聞いていた。

(板書しながら)

報告書における3の「松本市立図書館のあり方」というのは、僕は三段組みのピラミッドになっていると捉えている。

(1)松本市立図書館の将来像は、一番上の概念。これは先ほどの森委員の言葉を借りれば、ビジョンになる。このビジョンを実現するために何をやるのかというのが、サービスとして(2)に書かれている。このサービスを実践するソフト及び組織の話が(3)で書かれており、そのサービスを支えるハード面の話が(4)で書かれている。



ホワイトボード2

これは全て連動しているはずだが、ソフトとハードという性質の違いがあるから、(3)と(4)に分けているということだと思う。この(1)の実現のためにキーになる言葉をひとつだけ挙げるとすれば、先ほどから伊東委員長が言われている「地域」だと思う。

この「地域」というのは、ここの連結にも効いてくる話だと思うので、「地域」というキーワードを忘れずに、(1)から(4)まで書き下ろす、ということなのではないかと思う。

森田委員：

分かりやすい。

菊地委員：

そうすると、全体の構成として、全体の3における(2)、(3)、(4)が、それぞれ、何々に求められる視点というところで、全部、文末が「…に求められる視点」となっていて、最初は「すごくきれいだな…」と思いながら眺めていたのだが、これは「視点」という言葉で区切り過ぎない方がいいのではないかと、途中から思っていた。仮に自分のメモ書き程度に(2)、(3)、(4)を別の文言にしてみた。(2)を「将来像の実現に向けて目指すこれからの図書館サービス」とした。すると、今、視点1から5として書かれているものが、サービス内容1、サービス内容2というように、どんなサービスをするのかということ(2)で書くことになる。

(3)は「目指すサービスを実践する組織・職員に求められる資質と姿勢」としてみた。つまり、目指すサービスというのは、伊東委員長の言葉を借りれば、「地域に役立つ図書館」というサービスを実践するうえで、職員及び組織に求められる資質と姿勢とはどういったものなのかを書く。(4)は、今のところはということだが、「目指すサービスの運用を支える施設と設備」。

「目指すサービスの運用を支える施設と設備の整備」としてもいいと思うが、(2)から(4)をそのようにすると、具体的に何を書けばいいのかが見えてくると思う。

伊東委員長：

最初に「どうしても行政的な切り方になっている」と言ったが、まさに、そういう感じ。(3)のところと言うと、これは財政課向きな切り方。そこに視点2が入ってきている。まさに、図書館的には予算を獲得しなければいけないが、財政課的には資源の見直し・再配分。どこの行政でもやっていること。その記述でいいのだが、ビジョン到達のためということがはっきりしていれば、書き方も決まってくるということ。今、整理していただいたとおりでと思う。

**森委員：**

今の整理は私もいいと思う。そういうふうに整理すると、やや無理やり盛り込んでいた要素がいくつか入れられなくなるが、それは別途にすればいいと思う。あまりいろいろな要素が入り過ぎると根幹が見えにくくなる。今のようなストーリーに組み替えてもらうだけで、ずいぶんスッキリしそうだと思う。

このポンチ絵もいいと思う。この報告書の読み方の道案内になる。

**吉成委員：**

今の菊地委員の話に僕も賛成。

視点2の表題が「レファレンスサービスの充実と利用促進」になっているが、これは普通に図書館の中で伝える分にはこの言葉でいいと思うが、この言葉を使うことによって、すごく狭くなってしまふ可能性がある。もう少し「地域の課題に対応したサービス」というような言葉で固めた方がいいと思う。既存の言葉を使うとそこに当てはめて考えてしまうので、それはない方がいいと、今、菊地委員の話聞きながら思っていた。

**森委員：**

むしろ、この流れで、職員の皆さんが持っている『強み』の方を大切にしたい。

**伊東委員長：**

事例は、どうしようと思ってずっと考えている。職員さんからは塩尻をいっぱい出してもらっているが、やはり、事例としては出さないつもりでいる。

基本は同規模程度の市を中心にしておかないと、小回りの良い町村だとか逆に大き過ぎる自治体だと、ちょっと違って来るかもしれないので、様子を見ながらにしたい。とは言え、サービスには違いないはずだということも思いながらやっていきたい。鳥取県立図書館はすごいが、県立と市立の役割は違うと思っているので、この場合、鳥取県立を出してしまうと誤解を招く怖れがあるので、控えておこうと思う。ただ、医療情報と法情報は、やはり出しておかなければいけないと思っている。

医療で思ったのは大和市。あそこは船田さんという、ずっとやっていた人がいたので、相当入り込んだサービスをやっている。力が入っているので、ちょっといい事例かなと思っている。

**森田委員：**

棚がやさしい。分かりやすいところですよ。

**伊東委員長：**

神奈川県の大和市。

**森田委員：**

施設全体で「シリウス」という愛称を付けている（大和市文化創造拠点シリウス）。

**伊東委員長：**

森田委員が言われた新館建築に触れていくと、出すところがいくつも出てくるので、あまり深入りするつもりはないが、やはり触れておきたいと思っている。

そして、都城を出してもいいかなと思っている。都城は、まちの経営的な視点の中に図書館が上手くはまり込んでいるという捉え方をしているので、「図書館って、そういう役割を果たしう

るんだよ」というフレーズを出すには、都城はいいのかなと思っている。

2、3のソフトの事例を挙げておきたいので、もうちょっと考えたいとは思っている。  
事例の情報交換は随時、お互いに情報交換をさせていただきたいと思っている。

**森委員：**

「学校図書館」というキーワードが先ほど出ていたが、松本市の中で職員の人事交流というのか、異動しうる範囲に市立学校は入らないのか。全く別枠での採用なのか。任期付きで働いている方々は、通勤可能な範囲で異動しているということはあるですか。

**事務局：**

雇用形態、待遇が全く違っている。学校図書館の司書は5時間もしくは5時間45分の勤務ということで各校に一人ずつ、学校教育課が配置している一方、図書館はフルタイムの勤務で給与面の待遇も違うため、人事交流はできないということになっています。

**森委員：**

ひとつの学校に一人しかおられないという環境のなかで、学校図書館同士の連携はあるのだろうか。が、公共図書館がどうサポートできるかというようなところが、ひとつ大きな、とても大事なところではないかと思うので、その要素も事例として入れるのかどうかというところで落とさないようにしたいと思う。

**菊地委員：**

議題から逸れてしまうが、皆さんに報告と相談をしたい案件がある。

僕が店をやっているすぐそばに、市民芸術館があり、その広報誌で年3回発行されている『幕が上がる』フリーペーパーの編集委員として携わっている。

職員とやりとりをする機会が多いなか、今年度の始めに『芸術監督補佐』という肩書で水戸さんという方が就任され、水戸さんのミッションとして、劇場というものをいかにまちの方に向かって開いていくかということがあるということで、その辺りの話を「劇場」を「図書館」に切り替えたりもして、個人的にもいろいろと話をしている。

そのなかで、自分が図書館のあり方検討委員会の委員だという話と、森田委員が言われた『御用聞き』で提携できる文化アメニティ施設が市内にどこかないかという話をしたとき、水戸さんが「同じことを考えていた」と言われた。「芸術館の中に『ブックガーデン』と名付けて数か所に本を置き、ライブラリとして館内で自由に閲覧できるというものを考えている」とのことだった。

その本を誰が選書するのか、というところまでは水戸さんは考えていなかったようだが、図書館の司書さんがレファレンスとして、芸術館の職員から「こういう本があったら嬉しい」という話を受けて選書する、あるいは現場と一緒に見ながら、より積極的に提案するというような形で『ブックガーデン』を作れないかという話をしている。

今日はそのことを報告させていただいた。芸術館側の窓口は水戸さんになると思うので、図書館側の窓口を決めていただければ僕が間をつなぐので、かなり早い段階で実践に踏み込めるのではないかと思っている。

**森委員：**

双方向でできたらいいですね。

菊地委員：

芸術館からの？

森委員：

そう。図書館の一角にも、市内のそういう施設の人のお薦め本のコーナーを作るとか。

菊地委員：

いいかもしれない。

芸術館のライブラリ構想の中にも、ひと棚には芸術館の芸術監督・串田さんの蔵書を閲覧できるコーナーを作ってみるというアイデアもある。逆に中央図書館にも『串田さん選書コーナー』のようなものがあるというようなことができれば、面白いですね。

伊東委員長：

今の話は「図書館の本を持って行って…」という話ではないわけですか？

菊地委員：

図書館の本を持って行って、という話…。

伊東委員長：

そういう意味ですか。

菊地委員：

はい。

伊東委員長：

何が可能で何が可能ではないのかは、具体的な話なので、詰めてもらえばいいのだが、図書館にはこういう話が飛び込んでくる。

その時まさに、先ほどの「ビジョン」をどう据えているかで対応が全く変わるという好例だと思う。貸出数を増やすという、旧来からの図書館の目標を絶対視していると、今の話は貸し出しにならないはずなので、図書館は腰が引けてしまう。はっきり言えば、やらない。

ところが、地域に情報で役に立つ図書館づくりを進めるということになると、「待ってました！」ということになる。それくらい、あそこのビジョンに何と書くかによって、図書館の姿勢はがらり変わるものだということ。まさにいい話だと思う。

吉成委員：

菊地委員の話は、「本の貸し出し」というよりも、「価値を共有していく」ということですね。

「価値を共有していく」ベースがまちなかに複数重なっていくことで、何かが生み出せるかもしれないし、新しい事業が生まれるかもしれないということ。

伊東委員長：

そうですね。

吉成委員：

そこに、すごい可能性がある。もしかしたら本を貸すことによって、芸術館の3階のガーデンが変わるかもしれない。

菊地委員：

そう。まさしくそれで…。

吉成委員：

具体化するよね。

菊地委員：

そうなんです。今、吉成委員が言われた3階のガーデンというのは、芸術館のトップガーデンと呼ばれている屋上の『芝生広場』のこと。

芸術館の課題からすると、屋上にはなかなか人が登ってくれない。本当は公園の芝生のように市民の誰もが入ってきて、そこでピクニックしてもいいし、鬼ごっこしてもいいというスペースなのだが、なかなか…あの立派な劇場の中に入って行って、エレベーターで3階まで上がって、『芝生広場』。となったときに、敷居の高さを勝手に感じられてしまっている現状を何とかしたい、というのが劇場側の課題。

具体的に提案したのは、エレベーターで上がっていったときに、ベンチが置いてあって、そのベンチの上にバスケットと毛布とレジャーシートがあって、そのバスケットの中に本が数冊入っていて、冬の陽射しに当たりながら毛布にくるまって「この本、読んでみて」という提案が図書館側からある、と。それを持ってトップガーデンに出ていく市民がひとりふたり出てきて…ということが、例えば今だったらSNSで広まって、「それ、なんか素敵だから私もやってみよう」というふうになるというように、本の力で芸術館の課題を一つ解決することができる。

吉成委員：

是非、エディブルガーデンの本を入れてください。「食べられるガーデン」ね。

伊東委員長：

そうですね。今、森委員が、話の付け加えて「双方向」という話のなかで本を出してくれたが、「本」だけではないと思っている。図書館が扱う情報は、地域情報という意味ではチラシ1枚が重要な情報。そうすると、向こうが発信している情報を図書館が発信していけないわけがない。ましてや同じ「市立」であれば…ということ。

そういうことであれば、向こうにとっては図書館に情報を置いてくれるのを嫌だというわけがないし、図書館は地域の情報が発信できる。しかも11か所で発信できるという強みを持っているとすれば、こういう話はまさにWINWINになり得る話というふうに広がるはず。

これが一本繋がると、「いやいや、博物館もあるし、あそこもあるし…」というふうになってくると、これがネットワークになってくる。そういうような繋がりが生まれやすいはずなので、その発想を持てる職員というところにも繋がるし、その情報発信というところにも繋がる。そういう形が、やはりビジョンの据え方で見えてくる。

具体的な話、まさに具体的事例として出していただいております。

では、これで終わりにしたいと思います。

以上